

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院看護福祉学研究科長 殿

主査 竹生 礼子

副査 山田 律子

副査 鈴木 志津枝

副査 平 典子



このたび 平山憲吾氏 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目 進行がんを有する高齢患者の化学療法継続における意思決定の構造

2 論文要旨 すでに配布のとおり

3 学位論文審査の要旨

高齢のがん患者に対する化学療法の実施については治療方針の決定に寄与するエビデンスが乏しく、高齢患者は治療法を選択する難しさに直面している。本研究は、進行がんを有する高齢患者が、化学療法を受けることについてどのようにとらえて継続する選択に至っているのか、その過程と選択に影響を与える要素から構成される意思決定の構造を明らかにしたものである。

本研究は、進行がんを有する高齢患者で化学療法を継続している17名に対して、半構成的面接によるインタビューを行い、M-GTAの手法を用いて分析した質的記述研究である。結果、進行がんを有する高齢患者の化学療法継続における意思決定の構造は、化学療法継続における意思決定のプロセス、およびプロセス全体と影響し合う健康観から構成されること、化学療法継続に関する意思決定プロセスは、進行がんを有する高齢患者が治療を続ける意思を固めていくことを意味しており、プロセスを促進させるために、<歳なりの程よい状態の見立て>が中核的な役割を果たしていたことを見出した。また、高齢患者は、加齢と化学療法の影響を経験することにより健康観を柔軟に変化させており、健康観を頼りに治療継続を老いの過程に組み込んでいたことを明らかにした。

本研究のオリジナリティは、支援が難しいとされてきた進行がんをもつ高齢者の化学療法継続の意思決定について、当事者である高齢者自身の語りからそのプロセスの構造を明らかにし、考察したことにある。データ収集・分析は、理論的基盤の中で緻密に進められており、説明力のある結果を出すことができています。

審査員より、今後検討すべき課題として、以下の3点の助言があった。①<中核をなす概念>についての説明をより深く記述すること、②結果で扱っている意思決定と用語の定義との一致性を担保すること、③対象者の特徴を踏まえ、様相の特徴と意味を記述すること、である。

本研究の発展に向けた意見として、対象者の特性を変えた研究にとりくむことの期待が伝えられた。

4 最終試験の要旨

最終試験は、プレゼンテーション、質疑応答、博士論文審査基準による評価、審議というプロセスを経て行われた。論文内容のプレゼンテーションは、研究に至った経緯から結論に沿って非常にわかりやすいものであり、審査委員からの質疑に対する申請者の応答も適切であった。

審査の結果、本学位論文が新規性と独創性に富み、高齢者看護およびがん看護の実践に大きく貢献するものであり、今後の発展性も期待される優れた価値を有することを全審査委員が一致して認めた。

以上の結果 平山憲吾氏 は、博士(看護学) の学位を授与する資格が ある と判定する。
博士(臨床福祉学) ない